

<http://grimreaper.is-mine.net/>

カネミツ・ユウキの 魔法銃レポート

著：射月アキラ

序論・コタツでアイスはテツパンだ。

「被告人。そのアイスは誰のものだ」

「食ったからオレのものになった」

「食う前は誰のものだった」

「ふっ…：あいにく、過去は振り返らない主義でな」

「んなこと言ってもカッコよくねえからな！ 他人の名前書いてあるアイスのゴミ前にしてそんなこと言ってもカッコよくはねえからな!!」

雪の降りしきる冬の日のことだった。

備え付けの洋風家具の中、異彩を放つ純和風家具「コタツ」に足をつつこみ、向かい合って座る少年二人の間には妙に陰悪な雰囲気があったよっているようで、実際にはいつも通りのやりとりだった。

二人の間、コタツの天板に乘せられたのは、掌サイズのアイスのカップ。

中身はなく、フタには黒マジックで書いたと思しき「カネミツ」の文字が。

何食わぬ顔でステンレスのスプーンをくわえている少年・オキツグは、

「そもそもカネミツにハーゲンダッツなんて似合わないだろ」

完璧に開き直っていた。反省の色は微塵もない。

確かに、室内であつても首にさげたイヤーマフ——射撃時に銃声から耳を守るための耳当て——を外さないカネミツに、高級感が売りのアイスは似合わないかもしれない。髪の毛も安っぽい茶色に染められ、眉毛の黒が目立っているのも考え物だ。

しかし、オキツグ自身もハーゲンダッツが似合う見た目とは言えなかった。肩まで届きそうな黒髪の隙間から、右目を覆う白い包帯が見える。怪我をした、などという理由からではなく、一部中学生が意味もなく手首に包帯を巻いてしまうのと同じ症状である。

ようは、

「お前みたいな厨二病こじらせたヤツに言われたくはねえなあ！」

「ふん、オレの右目に秘められし大いなる力を見ていないからそんなことが言える。無知であることは幸福だな」

「そういう割にはその包帯しょっちゅう外してるよな！」

完全無欠に、単純明快に、ただの厨二病患者だった。

アイスを失い、さらに普段から厨二病発言に頭を抱えているカネミツは、ことオキツグを被告人にした場合、一番の被害者と言えた。

しかも、異国ロシアでの寮生活で同部屋、唯一の日本出身者同士と
いうことで、見事に逃げ場がない。

救いといったら、二人の趣味が妙に合っているところだろうか。

「しかし、クッキー&クリームとはいいい選択をしたな」

「お前のための選択じゃねえんだよチクショー！」

……救いにはならないのかもしれない。

「そもそもだな！ このコタツだって俺のものであつて！」

「一人でコタツは寂しいだろ？」

「ヤロウと二人でコタツも十分寂しいわ！」

諦めの表情を浮かべて脱力するカネミツに対し、いまだスプーンをくわえたまま離さないオキツグは腕を組んで胸を張っている。

それだけならまだしも、

「そんなへこむなつて。今度日本まで『ひとつ走り』行つて来たら買つてくるつーの。ガリガリ君ソーダ味とか」

フオローにもならない言葉を投げられれば、カネミツがキレるのも仕方のないことだった。

イヤーマフを乗せた肩が揺れる。喉の奥から押し殺された乾いた笑みが漏れる。

「ハーゲンダッツの代わりつて言うんだつたら……」

言いながら、カネミツはコタツのふちを掴み——アイスの残骸には目も向けず——天板の裏側がオキツグへ向くように横倒しにした。

なんの変哲もないローテーブルに布団をかけ、天板を乗せただけの簡易コタツの内部が露わになる。テーブルの内側に、暖房用のヒーターなどは付属していない。

ただ、子供がイタズラで貼ったと思われるも仕方のないような松明のステッカーが貼られていて、それがローテーブルをコタツにする仕掛けとなっていた。

「カントリーマアムのアイスくらいは買つてこいっつーの!!」

カネミツの叫びと同時に、ローテーブル——ではなく、松明のステッカーから巨大な火球が飛び出した。

——ここは、世界最大の領地を有する国ロシア。その広いタイガ地帯の地下にある、魔法学園都市・ワシリサの学生寮だ。

有機物、無機物を問わず、全ての物質から放たれるエネルギー・魔力を使い、魔法を発動させる術を習得する学び舎。そこに通う学生の中でも、カネミツの扱う術式は火の精密なコントロールに優れている。発射された火球を辛うじて避け、オキツグは転がるように窓へと向かう。

「コタツを武器として使用するとは……恐ろしいやつだ」

「お前の罪悪感ゼロな神経の凶太さの方が恐ろしいわ！」

会話の合間に放たれた追撃は、しゃがんだオキツグの毛先を炙るにとどまる。

一撃目、二撃目と、犠牲になったのは寮備え付けの家具だが、気にして立ち止まっている場合ではない。コタツのために土足厳禁となったラグの上から飛び出してブーツに足をつっこみ、オキツグは部屋の隅に駐輪した黄緑色の自転車——ライジング・フリーに手をかけた。

カネミツの術式に火が多く使われるのに対し、オキツグはよく風の術式を使う。

ライジング・フリーのボディ部分には、風の象徴たる剣と翼が描かれていた。

「逃げる気か！」

「ふ——オレとライジング・フリーの前にはなにも立ちふさがらない！　そう、風すらも！」

オキツグが高らかに言うと同時に、風が彼の障壁——ベランダに出るガラス戸を開放した。

冷え切った外気にカネミツがひるんでいる隙に、オキツグは外へ。地上二十七階の高さから、自転車にまたがった状態で飛び降りた。

解き放たれた右目の包帯が、尾を引いて流れていく。

「今回ぐらいはその厨二発言控えろっつーのこの野郎！」

「ライジング・フリー、システム・シフト！　レボリュション・ゴッド・インフィニティ！　オレとライジング・フリーの最速を目にとめてみせろ！」

「聞けええええええええええええええええええええええ!!」
アイスの恨みによって始まった戦いは、地下都市全体を舞台にして幕を開けてしまった。

本論一・バカにつける薬はない。

学園都市・ワシリーサの空には、巨大な頭蓋骨が浮いている。

一般的な一戸建て程度なら悠々と収まってしまいそうな頭骨の中には、あふれそうな大きさの火球が収まっていた。時折、ぽっかりと開いた眼窩や歯の隙間からこぼれた火の尾が、蛇の舌にも似た動きで空気を舐める。

生活律動調整及び防衛機構（ワシリーサのしるべ）——大仰かつ長い名前のついている頭蓋骨ではあるが、地下都市でもあるワシリーサにおいては、もっと単純な呼ばれ方をすることが多い。

生活に必要な明かりを提供し、昼と夜の明暗差と温度差を生み出すもの。

すなわち、「太陽」である。

「頭蓋骨の形した太陽とか、よくよく考えたら不気味だよな」

窓越しに（ワシリーサのしるべ）を見上げながら、カネミツは特に意味もなくぼやいた。

前日降った雪により、地下都市は白く彩られている。必然、窓から見える景色も相応に寒々しい色合いになっているが、過度な積雪がもたらす都市機能への影響を考慮してか、今日の太陽は若干火力が高くなっているようだった。

——あるいは、町のあちこちにできている、小さな円形や長い直線状の除雪地帯をごまかすためかもしれないが。

「分かってないなカネミツ。炎を内包した頭蓋骨がいつでも見上げられる場所にあるなら、そこに学長からのメッセージが込められていると考えるべきだろう。すなわち燃え盛る炎のごとき探究心と向上心を各々の頭蓋の中に」

「頼むから俺に現実逃避をさせてください！」

言わずもがな、カネミツの隣で熱弁を振るいかけたのは、彼のルームメイトである厨二病患者・オキツグだ。

前日、二人はアイスを発端にして発生した喧嘩により、寮備え付けの家具はじめ、道路や家屋に焦げ跡を残す器物破損、他人の家の敷地内を横断する不法侵入など、いくつかの法令違反を犯している。

魔法学園という特異かつ公に知られていないコミュニティ内の出来事であるため、科学的であることが求められる「表側」の刑事責任が問われることはない。そもそも、銃から発射された火球が家の外壁を焦がしたとか、異常な速度で自転車走らせてホイールのゴムが地面に焼きついたとかいう現象を、科学主義的な思想の中でできあがった法律で裁けないというのが現状だ。

魔法が世間一般に知られることになればまた別だが、世界に無用な混乱を招くよりは、自分の研究を優先させる性質を持っているのが、魔法使いという人種の特徴だった。

ともあれ、法令違反は法令違反である。

科学的な常識が通用しない学園都市であっても、全くの無法地帯というわけではない。ヒトが集まって暮らしていく以上、どうしても規制は必要だし、いけないことをすれば相応の罰則を受けることになる。学校から学生に対して与えられるそれは、表でも裏でもさして変わりはない。効果のほどがあるかどうかは定かではないが、とにかく執行者側に手間がかからない――反省文作成である。

かくして、カネミツとオキツグの前には真っ白なレポート用紙が並んでいるのであった。

「ふん。反省文程度、もはや今のオレには障壁にもならん。オレの右目はすでに、完成への最速ルートを見据えている……！」

「ンなこと言ってもカッコよくねえからな」

よくも悪くもいつも通りなオキツグに対し、カネミツのツツコミには覇気がない。

言っではなんだが、思ってもいないことで白い紙を埋めるのは、精神的にかなり負担がかかる。当然筆は進まないし、かといってありきたりな文章でお茶を濁すのも気が引ける。

なにせ、本来は個人で賠償しなければならぬところを、学校側で全て解決してくれている。そのことに恩義もなにも感じないほど、カネミツは無神経な人間ではない。

この反省文を誰かが真面目に読むことがあるかどうかは、また別の問題である。

「レポートだってまだ終わってねえのによー」

ぼやきながらようやくペンをとったカネミツに対し、オキツグは宣

言通りよどみなく右手を動かしながら、

「なんだ、まだ終わっていなかったのか。お前のことだから早々に片づけたと思ってたんだが」

「なんだよその、まあ俺は終わってますけどねー的発言は」

「終わってるぞ」

余裕の返答と同時にレポート用紙を埋め終えた。

それどころか、カネミツがなにも言えずに口をばくばくと動かしている間に、文章の見直しまで済ませてしまう。

「だいたい、ハーゲンダッツを食っているのはレポートを終わらせたやつだけだろう」

「デメエあとで絶対ぶつとばすからなチクショー」

「反省しないやつだな」

「お前に！ だけは！ 言われたくねえ！」

今のところ、アイスを食べたことに対するオキツグからの謝罪の言葉は全くない。

カネミツからすれば災難でしかないのだが、謝罪を要求しようとしても、オキツグ本人にしか通用しない理屈で適当に言い逃れられることは目に見えていた。

しかも、その理屈が通用すると本気で思っているらしいのだからタチが悪い。

「時に、カネミツ」

だから、というべきか。

オキツグは常に、自分のペースで会話を成り立たせる。

「とうとうオレたちの学年にも落第生が出るらしいぞ」

内容に反して、口調はあっさりとしていた。

「とうとう、って……まだ二年だろ？ 早すぎないか？」

「二年だからこそ、だろう」

オキツグは見た目に反した几帳面さでレポート用紙を三つ折りにすると、そのまま上着の内ポケットに収める。

彼の言葉は、他人から見えてふざけていようと大真面目であろうと、全てが本気である。

その性質を知っているからこそ、カネミツは内心で首を傾げざるを得なかった。オキツグは基本的に自分本位な人間であって、そこらの

他人に興味を持つことなどほとんどないからだ。

ましてや、落第生などという、言ってしまうえば他より劣っていると思われるも仕方のない人種に、軽々しく興味を持つような野次馬精神など持ち合わせていないと思っていたのだが。

「これからは魔法を作る側にまわらなければならんだからな。適性のない人間は少なからずいてもおかしくはない」

思わず、カネミツは周囲を見回した。

普段は多くの学生が集う談話室は、レポートの提出期限が間近に迫っているせいか人影がまばらだった。その上会話よりもペンの音が目立っているほどのだから、いつそ自習室になりはてていると言っても過言ではない。

しかし、その現状に不満を持っている人間など、全体の一割にも満たないはずだった。

カネミツたちの在籍する魔法学園（ババ・ヤガーの小屋）は、魔法開発に特化した教育が最大の売りである。無論、地下都市であるにも関わらず地上と遜色ない生活をおくれることや、魔法使いのみが暮らす閉鎖空間という安心感だけでも魅力的であるものの、それらは学園都市としての本分ではない。

——自ら魔法を創造し、行使するものこそ、魔法使いと呼ばれるべきである。

創設者であり、現学長、さらには地下都市・ワシリサを創造、維持している大いなる魔女の言葉を元に、（ババ・ヤガーの小屋）は成り立っている。

カネミツ自身、その教育方針に惹かれてわざわざロシアの地へ渡ったクチだ。同じ情熱を持っていない人間がいるなどと、本当は信じたくもない。

「まあ……なにも考えずに入ってくるやつもいるってことか」

「進路相談もバカにできんな」

「いや、フツの学校の進路相談で魔法学園とか言ったやつはお前しかいないと思うが」

「ふ。お前の世界は狭いな」

「そんな無駄な広さはいらねえ！」

そもそも魔法学園に対応した進路相談ができる場所は存在しないの

だが、それはともかく。

「ババ・ヤガーの小屋」が抱える問題のひとつに、その特異な教育理念に対する一部学生の無理解というものは確かに含まれている。「どれだけうまく魔法を使えるか」ではなく、「どんなことに、どうやって魔法を使っていくか」が評価の基準となってくるからだ。

他人が作った魔法をまねるのと自ら魔法を考案するのでは、必要な能力と心構えが違う。

「つーか、そんなことはどうでもいいんだよ」

話題を提供した本人によって反らされていく話を、カネミツが辛うじて軌道修正する。

「なんで落第生の話なんか出てきたんだよ。俺らには縁ないだろ」

「過信はよくないぞ。オレは今でこそお前の情熱を認めているが、少し気を抜いたらすぐさま切り捨てるからな」

「舐めんな。ここまで来て捨てられるほど安い情熱なんざ持ってねえんだよ。というかちよつと待て、切り捨てられても損害がなさそうなんだが」

むしろ、オキツグの非常識な言動に頭を悩ませなくていいだけ今より気が楽そうだ。

「ふっ、恥ずかしがらなくていい。オレはお前をライジング・フリーの後ろに乗せてもいいくらいに心を許しているんだぞ」

「……そりやどうも」

とめどなくあふれそうな否定の言葉は飲みこんでおくことにした。

オキツグの言うこと為すこと全てを相手にしていると、大抵ろくなことになる。カネミツは頭を抱える代わりにペンの尻でこめかみを押して、大して意味のなさそうな会話から思考を切り替えようとした――ところで、視線が下がって現実が突き刺さった。

そこにあるのは、真っ白なままのレポート用紙である。

「む？　なんだ。まだ終わっていなかったのか」

席を立とうとしたオキツグが、さらりと言って座りなおす。

誰のせいだよとくしょー、と返すだけの精神力は、カネミツに残されていなかった。

*

それは、彼にとって初めての誤算だった。

同時に屈辱で、言い訳のしようもなく失敗だった。

脳裏に刻み込まれた堅苦しい活字が、彼へ現実を見せつける。

寮の部屋に直接送られてきた用紙曰く――進級論文の命題を提出するよう求む。命題すら提示できない場合、当校への在籍は認められない。

「――くそっ」

思わず吐き捨てるが、意識の底にこびりついた文字列がその程度で剥がれ落ちるはずもなかった。胃の中のものも、肺の中の空気も、臓腑ごと外へ引きずり出してしまいたくなるような感情を、なんと云えばいいのだろうか。

ランディー・アッテンボローは、その答えを知らない。

「ふざけるなよ」

吹きすさぶ風の中で、幾度目かの悪態をつく。

ランディーがいるのは、地下都市ワシリーサの空――ドーム状の天井に「空」が映り、炎を内包したドクロが浮かぶ仮初の空である。

学園支給の箒にまたがり、自分が出せる限界の速度で飛行しながら、ランディーは自ら練り上げた計画を反芻する。

今更頭を抱えたところで、都合よく論文の命題が見つかるわけもない。二、三日迷った程度で思いつくならば、ランディーだって「落第生」などという不名誉な扱いを受けることもなかったのだから、それも当然だ。

この課題を正面から解決するには、魔法を使ってなにをするかを考えるべきだ。しかし、魔法を使うことそのものに意味と価値を見出すランディーからすれば、たとえそれが他人の作ったものの模倣であっても問題はない。

つまるところ（ババ・ヤガーの小屋）の精神と真っ向対立しているということなのだが、口うるさい家族から離れることを第一に考えていた彼にとって、学校の掲げる教育方針など気にするほどのことでもなかった。

どころか、学校が教える内容などどこも同じだろうと高をくくっていたふしすらある。

そんな彼だから、今回の課題を正面から正攻法で解決しようとは毛ほども思っていない。重要なのは学校の理念ではなく、自らへの評価を捻じ曲げ、認めさせる力である。

ランデイーが箒を進めるたび、顔に叩きつけられる熱波は強さを増した。家から持ち込んだマントに手を滑りこませ、内ポケットから取り出したのは、自ら漉いた紙と自ら流した血で構成された護符だ。

描かれているのは、保護された領域を区切る単純な記号――円。

護符が魔法の媒体となって発動するのは、術者の周囲を術者のための環境へと変異させる基礎魔法だ。行使した瞬間から熱波はランデイーに届かず、加速に伴う圧も姿を消す。

魔法に必要なのは万物から発生する魔力ではあるが、その魔力にも使いやすさがある。通常、術者が深く関わったモノであれば相応に扱いやすくなるし、縁のないモノであれば相応に扱いにくくなる。

故に、ランデイーの護符も強い縁を持つように作られているし、それだけ強い効力を発揮するようになっていく――のだが、そもそもそこまでの「暑さ」を感じる場所は、地下都市ワシリーサの居住空間にはない。

それもそのはず。

ランデイー・アッテンボローがいるのはワシリーサの上空――ドーム状になった天井の頂付近。炎を孕んだ頭蓋骨のすぐ近くだったのだから。

「ヘワシリーサのしるべ」……」

頭蓋骨の名称を述べ、ランデイーは引きつった笑みを口元に浮かべた。

ざわざわと湧きあがって来るのは緊張か、それとも高揚か。もはやランデイーには判別がつかない。ただ、今更なにもしないで引き下がることなど、できるわけもなかった。

ただし、それはランデイーの主観での話。まだ彼はなんのリスクも払っていない。

今ならまだ、レポートが書けなくて自棄を起こした学生で済む。そのことには努めて目をつぶって、自分にはこの道しかないと言い聞か

せるように、ランデイーは計画を実行に移す。

魔法学園（ババ・ヤガーの小屋）は、魔法開発のための学び舎である。

なんのために魔法を使うか、という問いに答えを出せない学生は、在籍すら許されない。

けれど、十余年で積みあげられたランデイーのプライドは、落第生などという烙印を許さなかった。答えを出せないのならば、力づくで実力を認めさせればいい。よく分からない単位の物差しで測られるなら、その両端を越える力を見せればいい。

かくして、ランデイーは計画を実行に移した。

生活律動調整及び防衛機構（ワシリーサのしるべ）——その制御を自らの手中に収める。

魔法使いの禁じ手たる「魔法の盗用」に、自信家な学生は愚かにも手をつけ、そして、

ランデイー・アッテンボローの魔力が（ワシリーサのしるべ）に侵入した途端、赤かった炎は光を飲み込む黒へとその色を転じた。

*

——（ワシリーサのしるべ）に異常が現れる数分前。

「……っ」

魔法学園（ババ・ヤガーの小屋）、中央塔四階の廊下を歩いていたオキツグが、不意に自らの右目を押さえて立ち止まった。

一呼吸遅れてそれに気づいたカネミツが、心底嫌そうな顔をしながら合わせて足を止め、顔だけで振り返った。

オキツグが長く伸ばした前髪と包帯で隠した右目を押さえるのは、癖と言うよりもはや習慣に近い。元々彼と行動を共にすることが多いカネミツではあるが、最低でも週に六回は見ているのだからむしろ日課と言うべきだろうか。

「またダークネスナントカだよ」

行動の後には言葉が伴うので、カネミツは先手を打って時間短縮を試みる。

オキツグによれば、彼は悪の組織と戦う宿命を背負った正義のライダーらしい。当然カネミツは信じていないが、なぜ自転車で悪の組織と戦うのかなどという疑問を口にすることは意識して避けていた。本人にしか通じない理屈で返されるのが目に見えていたからだ。

「いや、ダークネスパラノイドではない……悪意の純度が低すぎる。これは……」

しかし、今日に限っては様子が違う。

台本でも読むようにすらすらと出てくる「設定」の調子がすこぶる悪い。どころか、表情から焦燥や困惑すらうかがえる。

さすがに異常だと感じたカネミツは、肩にかけた旧式ライフルを背負い直して体ごと振り返った。オキツグは左手でライムグリーンの自転車を支えたまま動かない。

周りに人の気配は皆無だ。レポートの提出期限が間近であることに加え、〈ババ・ヤガーの小屋〉の中央塔四階は学長へ会うときくらいにしか通らないというのが理由にあげられる。

学長に会いに行く理由があるのは、よほどの優等生かよほどの問題児だけである。

そのどちらに属するのか、と問われたら、カネミツはすぐさま口を閉ざすが。

「これは、なんなんだよ」

「分からない。ただ、嫌な予感がする」

右目を押さえたまま、オキツグは自転車のハンドルを撫でる。

わけの分からない厨二病発言は多いものの、オキツグの予感はいく当たる。それが妄想なのか現実なのか外側から分かりにくいという問題は、直感と経験則でどうにかするのがカネミツの出した答えだった。

なにより、オキツグの「予感」——つまり「どこかでなにかが起きているのが分かること」の理由ははっきりしている。

オキツグが風属性の魔法を得意としているからだ。

全ての物質から発生するエネルギー・魔力が、魔法の源である。

魔法使いの技量は、その魔力をどれだけ自分に都合のいいように生させられるかにかかっている。オキツグの場合は自転車に貼られた「翼の生えた剣」のステッカーを元にした風属性の魔力がそれで、そういった象徴を身につければつけるだけ、魔法使いの場は強く支配されていく。風だけで窓を開けられるのも、その支配が強く広く行き渡っているためだ。

故に。オキツグは風の動きに敏感だ。

支配外の空気の流れが自分の場に影響を与えたときは、特に顕著に。「風が騒がしいな」

オキツグの言葉を裏打ちするように、どこかで慌ただしく扉を開く音がした。

より正確に言えば、カネミツの背後からその音は聞こえてきた。

次いで、平手で床を叩くような騒々しい足音が。

さらに、幼い少女のものらしい声が。

「あーもーなんたることじゃ！ 許すまじ！ 儂の大事なしるべに近づく輩がいるなど！」

苛立ちを叩きつけるような、駄々をこねるような言葉の羅列。

声の主を見ずとも察したカネミツは、肩に背負い紐を引っかけたまま、旧式ライフルの位置と角度を調節して右手でグリップを握った。

銃口は下に向けたまま、振り返る。

危険なのは声を発している人物ではない。なぜなら彼女は、

「――む？」

カネミツが振り返ったのと、相手が目前の人影に気づいたのは同時にしかなかった。

急制動をかけて立ち止まり、少女は「ふむ」と腕を組んだ。身にとっているのは素っ気ない白のワンピースで、靴も室内履きもない素足のまま。

一本の三つ編みにした長い白髪をマフラーのように巻けば防寒具代わりになるかもしれないが、雪の降る季節に暖房器具のない廊下に出るような服装ではなかった。

少女の眉根は深刻そうに寄せられていたが、数秒の後、なにかに気づいたかのように顔をほころばせた。

「おお！ レポートの提出かの？ しかし、それは一階のポストだと

説明したはずじゃが」

難しい問題を初めて自力で解いた子供のような表情だった。

「今朝反省文書けつつったのはお前だろうが！」

「ん？ ……あー、そんなことも言ったかね」

思わずツツコミを入れるカネミツだったが、今重要なのは反省文ではない。

話題の軌道を修正したのは、珍しいことにオキツグだった。

「――学長。さっき言ってた『しるべ』は（ワシリーサのしるべ）のことか？」

相変わらず、右目は押さえたまま。

悪ふざけの色など一切含めずに。

「なんじゃ、感じておったのか。例のカラコンの魔法かね？」

はぐらかすように言ってから、少女は肩をすくめた。

「怖い目をするでない。そこまで緊張するほどのことは起こつたらん」

「あのな、オキツグの予感と学長が外に出るのが重なったら、空から槍が降ってもおかしくねえんだよ」

「空から槍……ふむ、地下にいれば大丈夫じゃな？」

「例えばの！ 話だ！」

オキツグより質が悪い、とカネミツは辟易する。

自分の魔道を貫く魔法使いが自分のペースも貫く、というのはよくある話だが、ことこの二人に関しては極端すぎた。

「なに。このババ・ヤガー、なあんも対策を練ってないなどということはない。多少の問題ならさくつと解決してみせようぞ」

言って、少女――ババ・ヤガーは胸を張る。

カネミツの腰程度の身長しかないので威厳や迫力は全くなかったが、その名は強い意味を持っている。

ロシアの民話にも言い伝えられる、大いなる魔女。

地下都市ワシリーサを作り、魔法学園（ババ・ヤガーの小屋）を設立した、桁違いの「魔法」を実現する魔法使いである。

「で、結局なにが起こってるんだよ」

「若気の至り」

「……は？」

問いたただす暇は与えられなかった。

直後に、周囲が薄暗くなったからだ。まるで太陽に雲がかかって日光が遮られたかのようで、そうやって言えば自然現象のひとつではあるのだが、ワシリーサでは事情が違う。

地下都市に雲は発生しない。

カネミツとオキツグは、ほとんど同時に窓の外へ視線を向けた。

四階からは、ワシリーサがほぼ全一望できた。高くて二階建て程度の建物しかない町で、もっとも背の高い建造物は「ババ・ヤガーの小屋」である。

故に、太陽――「ワシリーサのしるべ」の異様はすぐに知ることができた。

宙に浮かぶ白い頭骨はそのまま、中に孕んでいた炎が、赤から黒へとその色を変えている。そのせいで辺りが暗くなったのはなんとなく理解できるが、根底にある原因には思い当る節がない。

黒い炎を収めた頭蓋骨に二人が目を奪われていると、傍らでババ・ヤガーがぼそりと言った。

「学生じゃよ」

一度ため息を挟み、

「できると思ってたんじやろ、魔法を盗むなんてことが。はあ、なんとか、今までなにを考えて魔法を使ってきたのやら」

教え方が悪かったのかのう、と言うババ・ヤガーは少し悲しげだった。

思わずカネミツがそちらに目を向けると、魔女は視線すら窓に向けていなかった。

もとより身長の関係で「ワシリーサのしるべ」を見ることができない角度ではあるものの、自嘲ぎみに苦笑する姿を見ると、それ以上の理由があるように思えてしまった。

「儂のしるべは、儂が丹精込めて創った魔法じゃ。儂以外の魔法使いが、適当に作った魔力を流し込んだ程度でどうにかなるような造りはしておらん。だが、他者を拒絶した魔法は儂の支配からも逃れてしまふ。あれは、ワシリーサの太陽であると同時に防衛機構じゃからな。勝手に敵を定めてしまったらしい」

やれやれ、と首を振る様子は、少女の容姿に似合わない、子供のいたずらを見た親のような呆れを含んでいた。

その感情は、学生ではなく「ワシリースのしるべ」に向けられているのだろう。

ババ・ヤガーは、確かに魔法学園の学長だ。

だがしかし。教育者である以前に、魔法使いなのだ。

「ということで、優秀な生徒には特別課題を出そうかの」
反転。

親の表情を浮かべていたババ・ヤガーは、即座に子供らしい顔でカネミツとオキツグに話を振る。新しいおもちゃを見つけたときのよう
な、楽しいいたずらを思いついたときのような、無邪気だがどこか危
険な笑みだった。

そして、手を差し出す。

どこから取り出したのか、小さな掌の上には金の指輪が乗っていた。
指輪でありながら判子の用途も兼ねそうな、特徴的な形状。判子とし
て使った場合に朱肉をつけられそうな部分には、「ババ・ヤガーの小屋」
の校章である金の鶏が彫られている。

「「ワシリースのしるべ」の後頭部に、この指輪で刻んだ紋がある。そ
れを押しなおせば、儼とするべの縁は戻り、制御がこちらに戻るじや
ろう。二人にはそれをやってもらいたい」

「さつきさくつと解決するって」

「自分で、とは言ってなかう」

笑みを深くするババ・ヤガーは、実に楽しそうだった。

カネミツは強く言い返せない。そもそも、学長からの直々の特別課
題など、学生が軽く断れるようなものではない。反省文を書かなけれ
ばならない事体を起こしている、という点でも、あまり下手なことは
言えなかった。

黙り込んだカネミツに代わり、反論したのはオキツグだった。

「しかし、学長。オレたちはまだ二年だが」

「なめに謙遜しとるんじゃ。似合わないぞ」

指輪を持っていない方の手をひらひらと振り、ババ・ヤガーは片目
をつむった。

ただし、オキツグの言葉には理がある。「ババ・ヤガーの小屋」は四
年制だ。最初の一年で魔法の基礎を学び、二年目で作る魔法の方向性
を定める。カネミツは旧式ライフル、オキツグは自転車という「魔法

の媒体」こそ持っているものの、完成しているとは言にくい。

魔法の完成度を上げていくのは、これから先。現在準備期間中のレポートを提出し、三年に進級してからの話だ。

その仕組みを作ったのは、他でもないババ・ヤガーであるはずなのだが。

「四年など、儂からすれば短いものよ。一年にも四年にも差なんぞない。あるのは魔法使いとしての熱量の差じゃ。それとも、その熱量すら否定するつもりかね？」

挑発するようなババ・ヤガーの言葉に、カネミツは反射的に手を伸ばしていた。

考えて、言われたことを噛み砕く間もなく、いつの間にか手の中に指輪が入っている。そんな気分だった。

けれど、立ち位置が違えばオキツグも同じ行動をとっていただろうと確信してもいる。

ひとつの物事に対する熱量の差は、人間関係に大きく関わって来る。「二年も付き合えばこういう行動をとると推測できるようになる」のではない。「こういう行動をとらない人間と二年も付き合っていられない」のだ。

その結果、学長の気まぐれに乗ってしまったとしても、後悔はない。自分の熱量を否定すること以上の後悔にはなりえない。

「本当に、素質があるのう。あとは普段の行動さえ改まれば、文句ないんじゃないが」

抑えきれない笑みを浮かべ、ババ・ヤガーはあっさりと言う。

応えず、カネミツは振り返ってオキツグに目を向けた。返ってくる隻眼の視線に迷いはない。普段はともかくとして、こういうときには頼りになる相手だった。

「別に、魔法の制限とかはかけないよな？」

「おお。なにかを壊したとかで、反省文を書けとも言わんよ」

「……そうかい」

からから笑うババ・ヤガーに対し、カネミツはげんなりと返す。この分では、ついさつき書いた反省文も有耶無耶のまま「もう必要ない」と言われそうだった。

「それじゃあ行くか、カネミツ」

オキツグはすでに自転車を反転させ、右目の包帯に手をかけている。もとより、行かない理由はない。ババ・ヤガーの作品たる「ワシリ」サのしるべに真っ向から勝負を挑む機会など、もしかしたらもう二度とないかもしれないのだから。

「ライジング・フリーはすでに、レースへの準備を整えているぞ」

「そういうの、こっちの気が抜けるから本当にやめろよな！」

本論二・若気の至りにも限度はある。

『警告。機構への介入を確認。罪なき全住民は屋内へ退避することを要請します』

それは、夏の街灯に群がる羽虫にも似ていた。

黒炎を吐き出す白い頭蓋の周りで、わらわらと蠢く白い点。地上からその形を判別するのは極めて困難だが、想像するだけなら容易い。そして不思議なことに、想像してみるとただの点だったものが「そういう」形のものであるように見えてくるのだ。

大きな眼窩と齒列を晒した、人間の頭骨。

蠢いているのは、〈ワシリィサのしるべ〉のミニチュアたちである。

『介入は許されません。介入は許されません。住民は屋内へ退避を。屋外へ残っていた場合、介入者と断じ防衛機構の執行権限を行使します』

ともすると感情的に聞こえてくるアナウンスは、全てが〈ワシリィサのしるべ〉とそのミニチュアから発されているものだ。ワシリィサのドーム状の天井を利用した声の反響は、町全体に行き渡って宣告を拡散する。

生活律動調整及び防衛機構〈ワシリィサのしるべ〉は、思わぬ侵入者を相手に過剰な自衛機能を働かせてしまったらしかった。

「あれ、全部『子機』か？」

手でひさしを作り、〈ワシリィサのしるべ〉を見上げるカネミツは、その姿勢を保ったまま〈ババ・ヤガーの小屋〉正面玄関から外へ出た。防寒用のケープをまとっているため、旧式ライフルは銃口を下に向けて肩に提げている。

彼の前では、黒いロングコートを着たオキツグが、右目の包帯を外して黄緑色の自転車——ライジング・フリーにまたがっているところだった。

「だいたい一二七機だな」

「なあ、『だいたい』の意味って知ってるか？」

「これだけ距離があると、まだ誤差が二、三は残っている。完璧じゃ

ない」

長い前髪の奥で、オキツグの右目がライムグリーンの光を放つ。

オキツグ曰く「風を読む」魔法が組み込まれた、緑色のカラーコンタクトだ。

「……さいで」

ぶはぁ、とカネミツがついたため息は、一瞬だけ白い塊を作って霧散する。ヘワシリースのしるべが防衛機構として働いている現在、生体律動調整機構——つまり太陽が、ワシリースには存在していない。

おのずと、気温は下降の一途を辿っている。

地下空間が保温に優れているとはいえ、雪で冷やされる都市の下部はさすがに寒い。

「多く見積もって一三〇か」

言って、カネミツは懐から小型の単発拳銃を取り出し、空に発砲した。

ぱすん、という気の抜けた銃声と、切れかけのライターののような炎がちらり。攻撃の用途ではなくカネミツの「場」を整えるためのもので、実際、続く言葉は白い塊を作らなかった。

「全部ぶっ壊すのはホネだな」

「カネミツが半分ぶっ壊して、オレがもう半分を追い抜いて置き去りにすれば問題ないな」

「壊せよ」

「あいにくだが、ライジング・フリーは破壊の道具じゃない」

「……さいで」

目を反らしながら適当に返してはいるものの、カネミツ自身もオキツグを戦力としては計算していない。

オキツグの目指すところは最速であり、作る魔法もそれに合わせたものとなっている。

火力を追及するのはカネミツの魔道である。

「それより問題はそっちだ。確かその銃、弾の数は一五発だったよな？」

「ん？ あぁ」

オキツグに問われ、カネミツは手元を見下ろした。

人差し指は伸ばしたまま、旧式ライフルのグリップに親指を引っかけて腰だめの位置まで持ってくる。中指から小指の三指で、トリガー

ガードと一体化した楕円形のレバーにつつこんでグリップを握った。カネミツの扱う銃はレバーアクション。その初期モデルであるヘンリー銃を元として、魔法的なアレンジを加えたものだ。

「確かに装填数は一五だが、空撃ちしても炎は出る」

「弾は補助か」

「火薬が入ってる。純粹に火力が上がるだろ？」

「ふっ……そこに小難しい象徴を組み込まない辺り、本当に実戦向けだなカネミツ」

「魔法銃が実戦向けじゃなくてどーすんだよ」

相手はいねえけど、という言葉は、極力小さい声で付け足した。

カネミツの目的は戦いそのものではない。漫画で見た魔法銃を、この手で再現することができればそれでいい。

その点、ヘワシリィサのしるべは実に最適な「的」だった。動き回る多数の子機を前に、魔法銃がどれだけ対応できるのか。そして、自分はその最適な射手たりえるのか。

わざとらしい苦笑いを浮かべたオキツグが、自転車の後輪を顎で指す。

「オレとライジング・フリーがお前を運んでやる。存分に撃て」

「おう」

旧式ライフルを肩に担いで、カネミツはオキツグの後ろへ近づいた。心臓が跳ねているような高揚感が、胸の底から湧きあがってくる。試し撃ちや演習ではない、実戦に向かう空気がそうさせるのだろうか。原因は定かではないが、自然と浮かんでくる笑みを抑える必要性はどこにもない。

カネミツがライジング・フリーの後輪車軸に足をかけると同時、ヘワシリィサのしるべから再び警告が言い渡された。

『三〇秒後に執行権限を行使します。罪なき住民は屋内へ退避してください』

「いつでも来い、ヘワシリィサのしるべ……オレとライジング・フリーの最速に、ついて来られればの話だがな!!」

オキツグの咆哮と同時に、ヘワシリィサのしるべから無数の子機が放たれた。

暴走した防衛機構の停止。

学長からの特別課題は、予想の通り少々骨が折れそうだった。

*

ペダルを一踏み。

たったそれだけで時速八〇キロに突入したライジング・フリーは、文字通りまばたきの間に街路を駆け抜けた。

「――っ」

後輪車軸の上に立ち乗りしているカネミツは、オキツグの肩に手をかけてどうにか体勢を整える。叩きつけられる風や加速に伴う圧は消えているが、視覚から与えられる情報は足元を不安にさせる。

道の両脇には魔法関連の商店が並んでいるものの、人通りは皆無だ。へワシリ―サのしるべによる避難警告はすでに終了している。薄暗い街で動いているのは、カネミツとオキツグの二人と、

「来るぞ」

オキツグに言われ、カネミツは咄嗟に顔を上へ向けた。

羽虫のように見えていたへワシリ―サのしるべのミニチュアたちは、すでにその形を判別できるまでに接近している。

黒い火炎を内包した白い頭骨が五つ。

巨大すぎる本体に比べれば確かに「ミニチュア」ではあるものの、その実成人男性の頭骨と同程度の大きさなのだから十分に脅威だ。

ミニチュアの一つが口を開くと同時に、前方を見ているはずのオキツグが体を傾ける。

進行方向と速度は変えず、車体を移動。数瞬遅れて黒炎が放射される。

三次元方向へ自律移動する火炎放射器。

防衛機構としてのへワシリ―サのしるべの本領は、ミニチュアの軍勢による「火炙り」にある。

「後ろは構うな。オレが振り切る」

「おう」

オキツグの断言に対し、カネミツが応える。

「前は俺がこじ開ける」

言いながら銃床を肩に押し当て、進路を塞ごうと降下してきたミニチュアを照準。

開かれた頭骨の口へ、旧式ライフルの銃口から飛び出した火球が直撃した。

続けて現れる二つのミニチュアにも、装填行動を挟まずに二発。引き金を引くだけの略式魔法を行使する。

魔法に必要なのは、象徴から発される魔力のみ。

その「引き金」をなににするのかは、魔法使いの個性によって違う。

カネミツの魔法銃の場合は、そのまま引き金を魔法発動の合図として利用していた。

火球着弾の衝撃だけで破壊された頭骨たちをかわし、オキツグはさらに加速。絶え間なくペダルを回しながら、さらなる魔法を行使する。

「風はいつだってオレと——いや、オレたちと共にある！ 燃え盛る炎を抱えた同胞を迎え入れろ、ライジング・フリー！」

「あのな、魔法に詠唱は必要ないつつうの！」

詠唱——ではなく、「掛け声」と共に、カネミツの体をオキツグの風魔法が支え始める。

不安定極まりない二人乗りを、いわば自動車のシートベルトのような感覚で安定化。これでカネミツは射撃に両手を使えるようになり、オキツグは、

「東方の草原地帯からワシリーサの端、空の壁に向かう」

「いいのか、囲まれるぞ」

「町が壊れるよりはマシだ——舌を噛むなよ、カネミツ！」

言いざま、急激な方向転換。

ほとんど減速しないまま、街路を左折する。

場を整える魔法により、肉体的に振り回されている感覚はなくとも、視覚情報はめぐるましく変化していく。

そのギャップに追いつけない脳が吐き気によって差異を埋めようとするのを、カネミツは頭を振ってごまかした。

メインストリートに比べれば幾分狭い道は、不必要なまでに入り組んでいる。店頭に並ぶ魔法関連の商品——怪しげな書籍やパワーストーン、各種植物——も相まって、典型的な「魔法使いの街」という印

象を炸裂させていた。

上空から照準しようとするミニチュアを撃ち落としながら、カネミツが苦言。

「もうちょっと安全運転はできないんですかオキツグさん！」

「曲がるからといって減速などできるはずがない——なぜなら、オレとライジング・フリーは最速を実現するために生まれてきたのだから！」

「お前、将来必要になっても絶対車の免許取るなよ!？」

時速八〇キロを軽く超えている自転車を駆っているのだから、必要にはならないかもしれないが。

それはともかく、

「なんでこんな入り組んだ道に入った？ 確実に最短ルートじゃないだろうが」

無秩序に左折と右折を繰り返す道筋は、道幅と傾斜、不意に現れる行き止まりや資材に対応した結果のそれだ。

オキツグが風を読んで進んでいるとはいえ、手間のかかる道をわざわざ選ぶ道理はない。彼の理屈がそれを受け入れるかどうかは別として。

「オレの右目が導くコースは最短じゃない、『最速』だ。それに、ここを通っている間、ヘワシリィサのしるべは垂直方向からしか攻撃をしてこない」

「あん？」

ただし、今回ばかりはオキツグにも理があった。

ミニチュアたちが水平方向の火炎放射を撃ってこない。

高速で移動する標的に対し、上空から垂直に火柱を落とすような攻撃は非効率にすぎるが、周りを見てみればその理由もおのずと知れる。

魔法のための物品が並ぶ、魔導具商店の数々。

まだ魔法使いによって象徴付けされていない、ナチュラルな魔力を放つアイテムがそこら中にあふれている。

「まさか、魔導具への影響を避けてるのか？」

「暴走しても、学園都市の防衛機構だということだな」

それに、と続けつつ、オキツグはハンドル捌きと体重移動で狭い道を駆け抜ける。

建物の隙間に遠く見えていた、青い空を映す壁が近づいている。

「誰かの魔力介入を受けて暴走状態に陥ったなら、誰のものでもない魔力だろうと積極的に近づこうとはしないだろう。実際、介入への拒絶は表明しているわけだからな」

介入は許されません——〈ワシリーサのしるべ〉が発した警告が、カネミツの脳裏で繰り返される。

「……やっぱ、そこまでの自律機能は持つてるよなあ、アレ」

「昼夜の明暗まで事細かに学長が命じているとは考えにくいからな」
淡々と言うオキツグに対し、聞いているカネミツの表情は渋い。

どうしても、敵わないと思うてしまう。生きている年数からしても比べものにならないのは確かだが、ババ・ヤガーの魔法は確かに凄まじい。

巨大な地下都市の維持も、疑似太陽も、防衛機構も、それらの存在を無関係な人間に悟らせない認識妨害も、なにもかもが桁違いだ。悔しいと感じることすらおこがましいと、心のどこかで思ってしまう程に。

ただし、おこがましいと感じることこそが間違いであると、カネミツ自身も理解している。

魔法使いの歩む魔道は、それぞれ異なっている。

カネミツ・ユウキとオキツグ・キラの魔道が同じでないように。

カネミツ・ユウキとババ・ヤガーの魔道は、決して同一ではない。魔法は比較するものではない。個人によって究めるものだ。

「安全地帯はそろそろ終わるぞ」

T字路を前に、オキツグが告げる。

カネミツは上空にミニチュアがいないのを確認。ライフルのトリガーガードと一体化したレバーを前に倒して、元の位置に戻す。

初弾装填。

火の象徴たる火薬を詰め込んだ薬莢が、薬室へと送り込まれる。

風を読まずとも、ミニチュアたちの——〈ワシリーサのしるべ〉のとする行動は分かっていた。水平方向での攻撃が叶わず、細く狭い路地を駆け巡る標的をどのようにして仕留めるか。

ライジング・フリーが最後の角を曲がる。

両脇には、相変わらず魔導具商店が並んでいる。正面の道路を駆け

抜ければ、ちょっとした草原を挟んだ向こう側に青空を映した地下都市の内壁が見える――はずだった。

魔導具商店街の出口を、白い壁が塞いでいた。

もっと正確に言えば、〈ワシリーサのしるべ〉のミニチュアたちが、ひしめきあって急造のバリゲードを構築していた。

このまま突撃すれば、たとえ「場を整える」魔法を展開していたとしても生身の人間は衝撃に耐えられない。

とはいえ停止することもできない。止まってしまうえば最後、方向転換をする隙もなく、上空から火柱が落ちてくることは目に見えている。

「ライジング・フリー、システム・シフト！」

であれば――と、カネミツと同様の思考に至ったのだろう。

スピードは緩めず、オキツグは重ねて魔法を行使する。

彼の魔道が追い求めるは「最速」。

故に、減速のための「掛け声」は存在しない。

「ファントム・オブ・ワンセカンド！ 目にも止まらぬ刹那を感じるがいい！」

宣告の直後、カネミツは旧式ライフルで進行方向を照準しながら呼吸を止めた。

ライジング・フリーの後輪から翼が生えるのも気にせず、神経を尖らせる。この瞬間に限り、眼球からの視覚情報と、右手人差し指のトリガーに全ての意識を集中させる。

オキツグの掛け声に合わせて、ライジング・フリーが叩き出す瞬間最高速度は秒速にして五〇メートル。ただし、「ワンセカンド」と名の付く通り、その速度は一秒間に限られる。

故に、今から引き金を引いても火球は後方に置いていかれるだろう。激突寸前、ライフルの初速を以て自分自身を追い抜くしかない。

視覚補助の魔法など開発していないカネミツが、一秒をさらに細かく切り刻む方法はただひとつ。死の直前に見ると言われる走馬灯の原理を利用して、脳の処理能力自体をブーストするしかない。

現に、秒速五〇メートルで近づく白壁を前に、カネミツの体感時間は疑似的なスローモーションで流れていた。

周囲の背景が停滞している中で、視点だけが壁に向かってゆっくりと進んでいる。

——まだだ。

通り過ぎた店の看板が、風に煽られて振り回されている。

——まだ早い。

ミニチュアたちが内包する黒炎が、ちらちらと揺れているのが視認できる。

——今！

まさに激突の寸前、カネミツの指がトリガーを引き切った。

撃鉄に叩かれ、薬莢内で火薬が炸裂。銃身内部に刻まれた炎の象徴がさらに火力を上乗せし、球形に整えられて銃口から射出される。

先ほどのまでの簡易魔法とは比べるべくもない。

白壁に命中した火球はその場でさらに爆発し、頭蓋骨をまとめて吹き飛ばす。着弾地点にあったミニチュアは粉も残さず、周囲にいたものも小さな欠片となって辺りにまき散らされた。

骨片と火の粉をかき乱し、爆炎渦巻く風穴をカネミツとオキツグが通過する。

開ける視界。小さな草原と、地下都市ワシリーサの外壁が広がる。

ライジング・フリーの翼が消え、速度が大幅に減衰。元の速度である時速八〇キロに戻ったのは、白壁を抜けた直後のことだった。

「……よく、止まらなかったな」

半ば呆れ、半ば感心して、カネミツが言う。

緊張と集中のせいのか、鼓動は今更のようにハイテンポで血液を巡らせていた。耳の裏側に心臓があるような、けれど不快に感じない騒がしさ。生きているという感覚を、ぼんやりと意識させてくれる音だった。

対するオキツグは、さらりと、当然のように。

「前は任せたと言っただろう」

「そういうバカ正直さは信頼できるところだよ……」

爆発の衝撃を逃れた頭蓋骨たちが今更のように追走しようとするのも無視して、二人は草原へ突入。

入り組んだ道も、障害になる物資もない。あとはひたすらに加速して、ワシリーサの外壁に辿りつけばいい。

はずだったのだが。

「……いる」

「は？　なんか言っ——」

ぼそりと呟いたオキツグが、あろうことか今まで指すらかけなかったブレーキを握りしめ、さらには車体とタイヤすら倒して急制動をかけた。

思いもよらない行動に、カネミツが追いつける道理もない。盛大に噛んだ舌から血の味こそしないものの、突然の凄まじい痛みには思わず言葉が途切れる。

タイヤのゴムが焦げつく匂いが風で流されたころ、ようやくカネミツが一言。

「いつか頭ブチ抜いてやる……」

「おい、見ろ」

なんなんだよ！　と顔を上げる前に、カネミツはふと思い出した。

いま、カネミツとオキツグは追われている身である。

空を自由に駆け巡り、炎を吐き出す防衛機構が彼らを追いかけていたはずなのだが、停止し、恰好の的になっている今も火炙りにはされていない。

視線を上げてみると、後方、かなりの距離をとった位置に、ヘウシリーサのしるべのミニチュアたちが止まっているのが見えた。その気になればものの数秒で人間二人を灰にできるはずだというのに、距離を詰めようとする気配がない。

忌々しげに、あるいは警戒するように、歯を噛み鳴らしてガシヤガシヤと音をたてている。

次いで、オキツグの指さす方を見ると、遠く、草原の端に土のめくれあがったクレーターができているのが目に入る。すぐ傍らに刺さっているのは、学園支給の飛行用箒だろうか。

「介入者だ」

断言するオキツグ。

しかし、否定する要素はどこにも見当たらなかった。

ババ・ヤガーは言った。この件は「若気の至り」によるものだ。

「学生」がヘウシリーサのしるべに介入し、魔法の支配権を奪おうとしたことに原因がある。

そして、介入者がクレーター付近にいるのだとしたら、ヘウシリーサのしるべの挙動がおかしいことにも説明がつく。他者からの介入を

受けた結果、持ち主のいない魔導具にすら介入を避けようとしているのだから、その原因に近づこうとしないのも頷ける。

なにより、〈ワシリーサのしるべ〉に異変が起こる前。オキツグは介入者を指して言っていた――「悪意の純度が低すぎる」。

「オレ自身がかつて言ったことを否定するのは心苦しいが、訂正する。アイツが持っているのは悪意という程のものでもない。八つ当たりする子供みたいな薄い感情だ」

クレーターから反らさないまま、オキツグは目を細めた。

ひとまずカネミツは怒りを収め、問う。

「で、それが停まる理由になんのか？」

異変が起こってから現在に至るまで、介入者は動いていない。

遠く、上空に見える〈ワシリーサのしるべ〉に直接触れないまでも、近くまで行ったことは確かだ。ということは、介入後、彼あるいは彼女はその高さから地面に叩きつけられたということになる。

「死んでるんだろ、アイツ」

「いや、息がある」

「……はい？」

そんなバカな、とカネミツはもう一度クレーターに目を向けた。姿こそ見えないものの、地面がめくれあがるほどの衝撃が、人体を破壊しないはずもない。

「あれで？」

「他人の魔法を奪おうとしたやつがどうなるか、知っているか？」

オキツグはクレーターに向けていた指を下ろし、続ける。

「魔法のための象徴を自分で選んだり作ったりしなくちゃならないのは、少しでも使いやすい魔力を安定して手に入れることができるからだ。そこらに落ちてるものの魔力を使っても魔法はできるかもしれないが、手間に対する見返りが少ない。自分のための魔力じゃないからだ」

では他人の象徴ならば、とオキツグは一呼吸挟んだ。

「誰かが象徴として……自分の魔法のために必要な、自分のために必要な象徴として使っているものを、他の誰かが使おうとしたらどうなるか。手間に対する見返りが少ない、なんていう次元の話じゃない。我をなくすことになる」

「我？」

「単純な話だ。魔法使いと象徴が、言うなれば力を合わせて作り出すのが魔法。その魔法を、魔法使いが一人で奪おうとしたら。魔法使いと象徴から発される二つの魔力と、そこに含まれる感情や意思に打ち勝たなければならない」

歯を打ち鳴らす「ワシリーサのしるべ」たちが、さらに騒々しくぶつかり合い始める。

カネミツの視線の先、クレーターの中心地で、立ちあがる影があった。

「二つの自我と一つの自我なら、勝つのは当然二つの自我だ。残念だが、どれだけ我が強くとも、支配から逃れようとする魔法には勝てない。逆に魔法に支配されるのがオチだ」

立ちあがった影は、人のような形をしていた。
黒い炎をまとった、人のような形をしていた。

驚く様子もなく、オキツグは坦々と。

「「ワシリーサのしるべ」は、その逆支配を子機の一部に任せて切り離れたようだな。被害を最小限にした、というわけだ」

「ちよつと待て、じゃあ「ワシリーサのしるべ」が学長との縁を取り戻して、通常の防衛機構に戻ったら」

「介入者は殺されるだろうな」

あつさりと言ったオキツグに対し、カネミツは舌打ちしてライジン・フリーから降りる。

確かに介入者に同情の余地はない。そもそも、自分の魔道を貫く魔法使いは、その道から外れたものに対して大抵の場合は興味を抱かない。

魔法に支配されて死ぬなら勝手に死ぬ、というスタンスでも、許されてしまうのが魔法使いのコミュニティだ。

当然、カネミツもそういう風に生きている。――生きているつもりだった。

「しるべは任せた」

言いざま、カネミツはババ・ヤガーから受け取った指輪を外し、オキツグに放り投げる。

怪訝そうな顔をするオキツグだったが、慌てることなく受け取って

一言。

「同情でもしたか？」

意外だ、だとか、幻滅した、などの感情すらこもっていない、確認のような問いだった。

あるいは、気の迷いだとか、ただの気まぐれだと思ったのかもしれない。事実、カネミツ自身も、これは気まぐれなのではないかと思つてしまふくらいだった。

魔法使いは基本的に、自分の魔道にのみ生きる生き物だ。

それ以外のものへ、好き好んで興味を向けたりはしない。

けれども、本当にそうだろうか。オキツグの問いを受けて、カネミツは黙考する。

確かに大抵の場合、魔法は魔法使いにとっての全てだ。生の全てを魔道にささげ、自らの追い求めるもののために命を使い尽くすことすらある。

ただ、それだけで魔法使いを「倫理的でない」とすることはできない。

魔法使いにも倫理はある。

オキツグの問いに対し、カネミツは首を振って否定する。

「俺が憧れた魔法銃使いたちは、死ぬ人間を見捨てたりしない」

旧式ライフルを肩にかけ、カネミツは介入者へ向けて歩きだした。

魔法使いにも倫理はある。

己の魔道を裏切らない、という、普遍的とは言えない魔法使いだけの倫理が。

「フツ……そうだな」

わざとらしく鼻で笑うと、オキツグはババ・ヤガーの指輪を右手薬指にはめる。

オキツグの魔道は最速への道だ。留まることに抵抗はあっても、前に進むことに迷いはない。

「遅れるなよ、カネミツ。オレが〈ワシリィサのしるべ〉を元に戻せば、アイツはお前の目の前で炙り殺されることになる」

「分かってらあ」

カネミツとオキツグはほとんど同時に走り出した。

それぞれ別の方向へ、自分の魔道が導くままに。

遠くからそれを認識したらしい介入者が人ならざる声で咆哮したのは、その直後のことだった。

本論三・バカと天才は紙一重だ。

レースも終盤に差し掛かったな、とオキツグ・キラは黙考する。

魔導具商店街という難所を抜け、同乗者を降ろした今、彼に追いつけるものはいない。カネミツと別れて以降も後ろを気にかける必要がないのは、それまでの走りでヘワシリーズのしるべのミニチュアたちの最高速度を把握済みだからだ。

今まで追いつけなかったものたちが、本来の用途——すなわち一人乗り——で走るライジング・フリーに追いつける道理はない。

実際、黒炎を孕んだ頭蓋骨たちははるか後方に置き去りにされていた。

代わりに、オキツグの目前には地下都市ワシリーズを囲む内壁が迫っている。

太陽が役割を果たしていないため、本来の薄青色はほとんど灰色に見える。

巨大なドーム状になっているとはいえ、地上付近では傾斜などない。灰色の壁を前にして、けれどもオキツグはペダルをこぐ足を止めない。止める必要も理由もない。

どのような悪路であっても、ライジング・フリーの最速は揺らいではならないのだから。

「ライジング・フリー、システム・シフト！」

同乗者がいなくとも、掛け声は高らかに。

「アルティメット・キングス・ロード！——俺たちの通る道が、王の道だ！！」

壁への衝突の数瞬前、オキツグは一度ペダルをこぐ足を止めて上体ごと前輪を持ちあげた。

超短距離のウィリーを慣性だけで実行し、前輪がワシリーズの内壁に当たった瞬間再びアクセル。ライジング・フリーはそのまま空が描かれた壁を上に向かって駆け抜ける。

壁も天井も一体となったドーム状の壁は、ライジング・フリーに刻まれた象徴により、オキツグの走る道と化した。

上下が逆さまになった視界で、オキツグは散り散りになった小さな

黒炎を注視する。

子機が後ろから追うのではなく、壁となつて本体を守る。へワシリーサのしるべは、相手に合わせて作戦を変えてきたらしい。

「いいだろう、へワシリーサのしるべ——後を追うことも、前に立ちふさがれることも、どちらも無駄であることを教えてやる」

オキツグの右目が黄緑色にきらめく。

遠慮なく黒炎をまき散らすミニチュアたちは、スピードはそれほど出ないが火力だけで十分な脅威である。オキツグは戦うための魔法も守るための魔法も作ってはいない。

ただひたすらに駆ける。へワシリーサのしるべのミニチュアたち突進しようが火柱を吐こうが、避けてかいくぐり迂回して、ただひたすらに駆け抜けるしかない。

もしそれができなければ——と、思考が仮定を始めようとしたところでオキツグは鼻を鳴らした。

最速のマシンの前に障害はつきものだ。どんな悪路でも最高のスペックを出せなければ、最高の乗り手にはなりえない。

自分が自分のために作りあげたマシンを、どうして裏切ることができるだろう？ たかだか一撃必殺の火柱程度、恐れるに値するだろうか？

ハンドルとペダルからこの身を引きはがされなければ、その死に恐怖する必要はどこにもない。

「行こうか、ライジング・フリー。最高のレースにしようぜ！」
太陽を守る頭蓋骨の群れに、学園最速はためらいなく突き進む。

*

カネミツ・ユウキは草原にできたクレーターに向かつて走っていた。相棒である旧式ライフルは、いまだに肩にかけたままだ。

銃身の長いライフルは、当然ながら近距離戦に向かない。相手の移動速度が分かるまで、その弱点をフォローできる拳銃タイプを利用した方が得策である——と、オキツグとの幾度にも渡るケンカで学んで

きたカネミツであった。

距離が近づき、有効射程に入った瞬間、カネミツは脇に固定したホルスターからレバーアクションのハンドガンを抜く。

ライフルと同様、装填なしでも撃てる構造。ただし、サブ・ウエポンのため弾数一。火力も弱くなる。

けれども当然、拳銃でトドメをさすつもりはない。

振り回しやすいハンドガンで牽制しながらクレーター近くの箒を確保し、機動力を得てライフルで狙撃、介入者からヘワシリーサのしるべを引きはがす。

短い時間でカネミツがどうにかひねり出した作戦は、相手の脅威度さえ想定以内であればどうか遂行可能なはずだった。

クレーターの中心で仁王立ちする介入者に目を向ける。ただの人影だった姿は、詳細を観察できるまでに近づいていた。

頭部と右肩、腰の左側に、ヘワシリーサのしるべのミニチュアが生えるように貼りついている。頭蓋骨の眼窩と歯の隙間から、時折細く黒い炎がちらついていた。

黒炎に炙られたローブはボロ切れのようになっていし、制服も燃えたり破れたりで原型をとどめていない。

魔法に取り込まれたとはいえ、ヘワシリーサのしるべが貼りついている以外の部分は生身の人間のようで、制服が破れて露出した一部の肌を見ても、火傷や打撲らしい痕がうかがえる。

生き延びていられたのは、逆支配を実行したヘワシリーサのしるべが、自分を守るために炎を使って衝撃を和らげたからだろう。火炎を吐いて上昇気流を作ったか、あるいは爆風で体を浮かせたか。

どちらにしても、介入者自身にこれ以上のダメージを与えるわけにはいかなかった。

もう少しで箒に手が届く、というところで、介入者がぐつと姿勢を低くする。

瞬発力を重視した獣のような構えだ。カネミツは咄嗟に走る軌道をずらし、地面に刺さった箒から距離をとる。

同時、地面を蹴った介入者が、カネミツに向かって突進を仕掛けた。ヘワシリーサのしるべが吐き出す黒炎をまとった体当たり。舌打ちする間もなく、カネミツは走る勢いのまま転がって回避する。

すぐさま立ちあがって今度こそ箒を確保——しようとしたところで、介入者の腰に貼りついた頭蓋骨が、こちらを向いて口を開けているのに気がついた。

渦巻く黒炎は放射される寸前。回避は間に合わない。ライフルを持ち直す暇もない。

カネミツはなにも考えずに、ハンドガンの小さなトリガーガードを前後させて火薬入り薬莢を装填。口を開いた頭蓋骨をポイントして、すぐさま撃った。

黒い火柱と赤い火球が衝突する。

爆風に煽られ、カネミツと介入者は再び距離をとった。飛び散る火の粉を払い、カネミツはようやく舌打ち。額から落ちる汗を拭う。

今まで追いかけてまわされてきた「ワシリーサのしるべ」のミニチュアたちと比べれば機動力はないが、それでも人並みの移動手段しかないカネミツには厳しい相手だった。

箒という機動力を確保するために急ぎすぎたか、と思うもすでに遅い。

両者はすでに白兵戦の間合いに入っている。

「近接戦用装備……次のレポートのテーマにでもするか……」

ぼそりと言って、カネミツは拳銃を構え直す。

小さな拳銃にはそれほど多くの象徴を組み込めないため、火薬の補助があつてようやくライフルの空撃ちと同程度の威力が出せる。残弾ゼロになった今、ハンドガンは目くらましか牽制程度にしか使えない。

それでもないよりマシか、とカネミツは介入者の頭に貼りついた頭蓋骨を照準。そこからさらに上に狙いをずらして撃つ。

姿勢を変えずとも当たらない弾道だったが、介入者は大げさに身をかがめて火球を嫌うような動きをした。カネミツの予測通りの動きだった。

魔導具商店街で、「ワシリーサのしるべ」の子機たちは魔導具への干渉を嫌っていた。

持ち主のいない象徴ですらそうなのだから、カネミツの魔法である火球も嫌ってしかるべきだ。介入者と共に切り離された、いわば「切られたトカゲのしっぽ」であるミニチュアならば、その反応はより強くなる。

間髪入れずに次弾、次々弾を撃ちこみ、介入者を足止め。カネミツはその間に、地面に刺さった箒に近づいていく。

でたらめに腕を振り回し火の粉を払う介入者は、かなり苛立っているようだった。

「もうちょい……おとなしくしてろよ」

介入者を操る「ワシリーサのしるべ」が火球を嫌うならば、もう照準をずらす必要もない。

カネミツは介入者を狙って火球を撃ち続ける。

連続使用に耐えるように作っていない銃身が、細く薄い煙を出しているのが見えた。放出されきらない熱は、グリップを持つ右手にも伝わってくる。

マズいな、と思いつつも、カネミツが介入者から目を反らすことはできない。

火球が直線状の軌道しか描かないことに気づいたのか、介入者は右へ左へと体の位置を変えて照準を狂わそうとするようになった。

少しでも隙を見せれば、先ほどのような突進で一気に距離を詰めてくるだろう。

足が箒に当たって、カネミツは片手で柄を掴む。箒につけられていた象徴——介入者が漉いたらしい紙を手探りで剥がし、代わりに懷に入れていた飛行用のステッカーを貼りつけたところで、拳銃が限界を迎えた。

ガチリ、と引き金が後退しきった。にも関わらず、火球が銃口から飛び出していかない。

まずいと思った次の瞬間には、介入者が深く屈みこんでいるのが見えた。

地面に刺さった箒を抜きざま、カネミツも姿勢を低くする。役に立たなくなった拳銃を投げ捨て、芝生に手をつけて這うと、介入者が頭上を凄まじい勢いで通り過ぎていった。

地面を削って減速する音を聞いて、カネミツは片手を地面につけたまま箒にまたがった。

ステッカーの魔力を行使。デフォルメされたジェット機が、飛行のための魔法を発動する。

介入者の二度目の突進は、急加速した飛行箒の尾をかすめていった。

地面に激突しないように体を持ち上げながらも、介入者との距離に気を払う。

離れすぎではへワシリーサのしるべの本体から標的にされかねないし、近すぎても突進や火柱が襲いかかってくる。ひとまず安全圏に入ったところで、カネミツは一度顔の汗を拭いた。

不得手な距離で、時間を使いすぎた。

ちらりと上方へ視線を向けてみれば、地下都市の内壁付近でへワシリーサのしるべのミニチュアたちがわらわらと蠢いているのが見える。ドーム状の内壁を地上からへワシリーサのしるべまで走ったとして、その半分以上をすぎたところだろうか。

おそらく、オキツグはすでにその場所まで辿りついているというところだろう。

時間は限られている。

オキツグがへワシリーサのしるべの本体に辿りつけば、介入者はカネミツの目の前で焼き殺されてしまうだろう。

「へっ……本番はここからってか……」

介入者へと視線を戻し、カネミツはライフルを肩から降ろす。

己の魔道を貫くための相棒を。

「コイツは動作不良なんざ起こすような、優しい造りはしてないぞ」数秒後、火球と火柱は再び激突する。

*

高速で駆け抜けるライジング・フリーの右脇を、黒炎が通り過ぎていく。

肌身に熱を感じながらも、オキツグに憂慮などの感情はない。ライジング・フリーのホイールに使っているゴムは、その速度のみならず、急停止・急旋回で生じる擦過熱にも耐える。直撃ならまだしも、かすめる程度で弱るものではない。

そして、直撃する気は毛頭ない。

正面に周りこんでくるミニチュアの動きを見て、オキツグは軌道を

九十度変更。その背後にいた第二陣、第三陣の火柱が届かない距離に至ってから、天頂へ向かう軌道に戻る。

オキツグ・キラの目指す魔法は最速の体現。

故に、選択されるルートも最短ではなく最速を実現するためのものだ。

「止められるものなら——止めてみる！」

咆哮。

自らを奮い立たせるかのような叫びと共に——否、叫びを置き去りに、オキツグはワシリーサの空を疾走する。

顔のすぐ横を頭蓋骨が通り過ぎていく。

背中をかすめるように火柱が立つ。

数瞬の間すら空けずに、死の可能性はオキツグの前に閃いて消える。脊髄が淡く痺れるような緊張感。しかしオキツグにとっては、それすらもレースの一部だった。

「——は」

呼吸の合間に一度漏れた笑みは、抑えることもできずに深くなる。

口元だけで獰猛に笑むオキツグの前で、ヘワシリーサのしるべが動きを見せた。

本体を中心に、整然と並ぶ子機。地上から見れば空にドット柄が描かれているようにも見えただろうが、同じ高さにいるオキツグから見れば、それはただの機雷原だった。

互い違いに並ぶ頭蓋骨たちの間を走るのは、路上に並んだコーンを左右に避けながら進むのとはわけが違う。

「——いいコースになってきたな、相棒！」

それでもブレーキに指すらかけず、オキツグはペダルをこぎ続ける。黄緑色の右目が、一際強く輝いた。

風の流れを可視化。地下都市の「上空」で無数の黒炎に煽られた風の道は、無秩序に交わり合っている。

オキツグに従って背中を押し、道を空ける従順な風はいない。

場を支配しているのは、ヘワシリーサのしるべから薄く広がるような魔力だった。

冷や汗が一筋。オキツグのこめかみから流れる途中で、はるか後方に弾き飛ばされる。

相手の領域に入ることとを恐れている場合ではない。

もとより、地下都市ワシリーサ全てが相手の領域なのだから。

「ハンドリングだけは、魔法に頼るわけにはいかないな」

汗で滑るハンドルを掴み直し、オキツグは言う。

「オレの進む道はオレが決める」

断言。それに応えるかのように、ライジング・フリーはさらに加速する。

ほとんど突撃のような勢いで、オキツグは機雷原へとつつこんでいった。

回避行動を繰り返す軌道は、路面との摩擦を増加させる。ギヤリギヤリギヤリ！ とホイールの悲鳴が甲高く響く。

頭蓋骨たちの間にある隙間は、自転車一台がようやく通れる程度。

加えて、道を塞ぐような、あるいは追いつくような火柱があちこちから放たれる。

「————ッ」

いつしか、オキツグは半ばほど呼吸を止めていた。

見開いた目が乾きを訴えるのも忘れ、進む道を見定める。奔放に行き先を変える風を手懐け、それこそ風と共に——風となって走る。

機雷原の半ばをすぎる。

オキツグの視界が暗転しかけ、無理にでも呼吸しようとしたところだった。

目の前に並ぶ頭蓋骨たちの向こう、ヘワシリーサのしるべの本体が、深い影を落とした天頂。そこに並んでいた子機たちが、影をより濃くしようとするかのように集まり始めた。

道を塞いだつもりか。歯を噛みしめ、オキツグはヘワシリーサのしるべを——近づきすぎて後頭部しか見えない巨大な頭蓋骨を睨みつける。

同時、速度を保ったまま後輪を滑らせ、車体を横に倒す。残ったミニチュアたちの下を、スライディングのような姿勢で一息に潜り抜ける。

一部のミニチュアたちが一点に集まったおかげで、その先にはわずかではあるが開けた空間が生じている。

車体を持ち上げ、コーナーのない直線を使って加速。加速。加速。

呼吸を求める肺を無視して、オキツグは声を出す。

極度の集中で瞳孔が収縮。黄緑の燐光が尾を引いて流れていく。

対の白翼が生える。

不透明な翼は未完成。まだ魔法として完成していない、開発段階の奥の手だ。

されど、出し惜しみをしている場合ではない。

「その目に焼きつけろ……オレたちの翼を！」

オキツグの叫びと同時に、翼が羽ばたく。

そして、目前に迫った頭蓋骨たちの塊を――飛び越えた。

真上には、ヘワシリーサのしるべの後頭部がある。あまりに巨大すぎて、その向こうにあるはずのワシリーサの街並みはほとんど見えな
い。

オキツグは右手をハンドルから離れた。

巨大な頭骨の、もつとも影が濃い部分。天頂との距離が近い場所に、
ババ・ヤガーが捺した印がある。

オキツグの右手薬指には、術者と魔法の、ババ・ヤガーとヘワシリ
ーサのしるべの縁を繋ぐ指輪が。

「飛、べええええええええええええええええ！！」

咆哮。そして、その直後――

*

介入者を照準するカネミツの右目に、汗が流れ落ちる。

飛行と射撃の動きにも、火球と火柱の熱にも耐えた水滴が、瞼の下でどまつている。

視界が歪む。

「……くそ」

一度ライフルを下ろし、箒での移動を続けながら乱暴に汗を拭う。束の間ではあるが目を塞ぎ、拭い終わって視界が回復した直後には、焼け焦げた制服のスラックスが目前に迫っていた。

——火柱で加速した介入者による回し蹴り。

慌てて体を横に倒したカネミツの左頬を、革靴のつま先がかすめていく。勢い余って地面に激突しかけた右半身では、芝生と接触した上着がかすかに焦げた匂いを発していた。

銃を持たない左手で箒の柄を掴んでいなければ、地面に激突していただろう。

「っ殺す気か！」

仮にも「防衛」機構だろうが！ という心の叫びも意味を持たない。暴走状態の防衛機構から切り離された危険分子に対して、あまりにも無力すぎる。

すぐさま思考を切り替え、カネミツは介入者の無防備な左半身に向けてライフルを構える。

狙うは左腰に貼りついたヘワシリサのしるべのミニチュア。

だったのだが、相手が無防備な姿勢を見せたのは一瞬だった。

介入者の右肩から、黒炎が噴き出される。

ジェットエンジンのように扱われた火柱は、介入者の右腕の動きを加速。握りしめられた拳がカネミツを狙う。

両腕が塞がれた状態では、急回避はままならない。人外の、ためらない速度で繰り出される拳を防ぐ術もない。となれば、

——死ぬなよ！

一方的に、声にすら出さずに願いながら、カネミツは照準をずらし、介入者の右肩を狙う。

火球が射出。着弾。爆発。火の粉を受けながら熱風に煽られて、カネミツと介入者は互いに距離をとる。

移動ではなく姿勢維持に全神経を傾け、カネミツはまず自分の体を確認した。火の粉を浴びたケープから、薄く煙が立ちのぼっている。小さな火種が生まれかかっているところだった。

もはや防寒具など必要ない。カネミツはケープを脱ぎ捨てて箒の上から踏みつけ、適当に鎮火すると、今度は介入者へ目を向けた。

発砲時、両者の距離はライフルには近すぎた。外しようなないが、

着弾点の真横には頭がある。

確かに何度か殺されかけているが、カネミツ自身に介入者を殺すつもりは全くない。そもそも、〈ワシリールサのしるべ〉の暴走状態さえ解除すれば勝手に死ぬ相手だ。

果たして、介入者はいまだ両足で地面を踏みしめていた。

右肩に貼りついてた頭蓋骨は破壊され、介入者の肉の色が見えるようになっていた。

とはいえ、無事とはいえない。火を内包した頭蓋骨が貼りつき、その上で火球が炸裂した右肩は、ひどい火傷を負っているように見えた。「火傷で死ぬんじゃないだろうな……」

カネミツは火を操る魔法を扱っている。火傷についての知識なら、細かい数字は覚えていなくてもそれなりに身についているし、身にかけている。

体の広い範囲に火傷を負えば、人間は体内の水分が失われてショック症状を起こす。

そうならないためには適切な処置を、迅速に施さなければならないのだが、

「……あと二つか」

障壁となるのは、介入者に貼りついた防衛機構だった。

カネミツは唇を舐めて湿らせると、ケープを踏みつけていた足を浮かせて再び飛行。

火傷によるショック死であろうと、制御を取り戻した〈ワシリールサのしるべ〉の集中「放火」による焼死であろうと、介入者の死を避けるためにはとにかく急ぐしかない。

早すぎることに越したことはないのだ。最悪、オキツグが間に合わなくても応戦はできるし——なにより、あの男が自分より「遅い」なんて状況は、想像することができなかった。

「学園最速に追いつかなきゃならないのは、むしろこっちだからな」
言って、カネミツはニヤリと笑む。

ライフルの銃床を右肩に押しつけ、しかし銃口は下に向けたまま、〈ワシリールサのしるべ〉を一つ引きはがされた介入者の動きを見定める。

ふらふらと不安定に揺れていた介入者は、次の瞬間、膝を追って体

を深く沈めた。

突進の前兆行動。カネミツは先に回避を始める。

その流れを読んで介入者が軌道を微調整するところまで、すでに何度も繰り返したやりとりだった。火柱が立ったことによる熱風が、両者の間を凄まじい勢いで暴れまわる。

「――ッ！」

突進の勢いを乗せて放たれた介入者の拳は、頭蓋骨によるブーストがかかっていなくても驚異的な威力を持っていた。

カネミツの頬をかすめた拳は、直撃に至らずともその威力を発揮する。空気が避けるような、あるいは鼓膜が空気に圧されたような、耳鳴りに似た音がカネミツの聴覚を支配する。

その隙を突くように、カネミツの回避先にはすでに介入者の足が置かれていた。

膝を体の内側に引き寄せるかのような膝蹴り。

ただし、予測済み。カネミツは空中で側転運動でもするかのように、膝が命中しそうな腰部分を飛行用箒で持ち上げた。

頭のすぐ「下」を、介入者の膝が通り過ぎていく。

上下が逆さまになった状態で、カネミツはライフルの銃口の向かう先を、少しばかり調節して介入者の左腰を狙う。

そこに貼りついている頭蓋骨は、口を開いてカネミツの方を向いていた。歯の隙間から漏れ出る炎は放出寸前。

ほとんど無意識に、反射的にカネミツは装填行動を完了していた。薬室に入っていた空薬莢が弾き出され、代わりに弾丸が叩き込まれる。

火柱の放出と火球の発砲は、ほとんど同時だった。

両者ともに、不安定な姿勢からの攻撃行動。加えて、さきほどまでよりも強烈な爆風と熱風。肺の中まで空気に焼かれそうで、カネミツは思わず息を止めた。

箒を掴んだまま、空中で二、三回転。

ようやく止まったときには、本当に足が地面の方を向いているのか怪しく思うくらいに半規管が揺さぶられていた。

実際に地面を見て上下を確認すると、風に煽られたせいか、高度が少しばかり上がっている。おおよそ十メートルほどだろうか。ぶは、と息を吐き出す。

肌がヒリヒリと痛むのは、ごく軽度の火傷を負っているからだろうか。熱湯から立ちのぼる湯気に、手を当ててしまったときのような感覚。

介入者の方を見ると、白煙と土煙に覆われて姿が見えなくなっていた。火柱に負けず、火球が着弾していれば、介入者を支配するヘワシリサのしるべはあと一つになるはずだ。

銃を持たない左手で箒の柄を掴み、カネミツはいつでも動ける姿勢をとる。時間がないとはいええ、やみくもに撃ちこむわけにはいかない。と、薄れてきた煙の先で、蠢くなにかが垣間見えた。

黒い。渦巻くような軌道を描く——いや、渦巻いているのは周囲の空気で、白煙で、土煙だった。

黒炎。

火柱として炸裂寸前の凝縮された黒炎が、介入者の頭に残ったヘワシリサのしるべの中で圧力を増していた。頭蓋骨の眼窩から揺らめく炎が、怒りを孕んでいるようにすら見える。

「————っな」

カネミツの口から漏れた声に、続く言葉などない。

ただの魔法であるはずのヘワシリサのしるべの視線に、いまこの瞬間、カネミツは確かに恐怖していた。

そして、火柱は吐き出される。

縫い止められた獲物を射るかのように。

白煙と土煙が落ち着いたあとには、黒い煙が芝生の上に立ちのぼっていた。

介入者は、覚束ない足取りで黒煙の元に向かう。

右肩と左腰の同胞を失ってはいたが、ヘワシリサのしるべはいまだ体の主導権を握っていた。とはいえ、体の方はそろそろ限界を迎えそうで、頭に貼りついた子機はかすかな危機感を覚えている。

この体が死んだら、どうなるのだろうか。

すでに親機からは切り離された身。帰る場所などどこにもない。いずれ壊されるのかもしれないが、それまでは自身を維持し続ける必要

があった。

故に、傷のない、新しい体が必要だったのだが、

「……………」

沈黙したまま、〈ワシリーサのしるべ〉は黒煙を見つめる。

二機の同胞を壊した魔法使いは、すでに死んでしまっただろうか。

介入者の体から感じ取れる視覚や嗅覚を使つて判断しようにも、〈ワシリーサのしるべ〉は人を焼いたときの煙の色や匂いを知らない。

仕方なく、〈ワシリーサのしるべ〉は適当に介入者の腕を振って煙を払う。

煙の隙間から垣間見えたのは、炎に包まれる飛行用箒と——それだけだった。

固まる〈ワシリーサのしるべ〉に、真横から銃口が向けられる。

「言っただろ」

絞り出すような声がした。

確認すると、先ほどまで敵対していた魔法使いが、黒煙をあげて焼け死んでいたと思われた魔法使いが左手でライフルを構えて立っていた。

右腕は力なくぶら下がっていて、魔法使いの顔は笑みを浮かべているものの脂汗が浮かんでいる。

落ちたのか——いや、飛び降りたのか。

「こいつは高いところから落ちた程度で動かなくなるような、優しい造りはしてねえんだ」

その言葉が、〈ワシリーサのしるべ〉が外界から受け取った最後の情報だった。

結論・コタツじやなくてもアイスはうまい。

カネミツ・ユウキは（ババ・ヤガーの小屋）の廊下を疾走していた。それこそ、他人には見えないが、この上なく恐ろしいなかに追われているがごとく。

めったに見せない真剣な表情で。ギプスで固定した右腕にも構わず。実際、彼は目に見えないものに追われていた。

容赦なく、冷徹に、慈悲の欠片も見せずに学生を殺す――レポートの提出締め切りに。

前方、教員によって設置されたポストが見えてくる。締め切り時間の到来一分前。

すでに、厳格なタイム・キーパーはポストの前に陣取っていた。腰までの白髪を三つ編みにした、ノースリーブワンピースの幼女。学長ババ・ヤガーだ。

「遅いっ!!」

一喝。

されど、締め切りを前にしたカネミツには通用しなかった。

「誰のせいだよ!!」

叫び返しながら、左手で掴んでいた茶封筒（レポート入り）をババ・ヤガーに投げつける。

そこそこの勢いがあつたはずだが、ババ・ヤガーは意にも介さず軽く受け取って、満足げに頷いた。

その手前で、カネミツは膝に左手をつく。無理に無理を重ねたせいで、体の節々が痛い。

「うむうむ。いい重さじゃ。今から読むのが楽しみで仕方ないぞ」

「のんきに、言ってる、場合、か」

「これっぽち走った程度でなーに息切れしとるんじゃ。若いのに情けないのー」

「こちららテメーのしるべに炙られたばかりなんだよ!」

ほとんど反射的にツッコミを入れたカネミツは、酸素不足で咳き込むはめになった。

その間に、カネミツと同じようにギリギリで提出する生徒が二、三

人。ババ・ヤガーに野次られながら、レポートをポストに入れていった。

「……で、肉の焼き加減の話じゃったかの？ 儂はじっくりミディアムが好きなんじゃない？」

「それを聞いた俺は学長をミディアムにすればいいのか？ いいんだな？」

「儂のしるべはレアが好きらしいのう」

「ウェルダン通り越して危うく炭になるとこだったつーの……」

けらけら笑う学長から目を反らし、カネミツは若干遠い目をしてぼやいた。

介入者との戦闘で負った傷は、右腕以外ほとんど完治寸前のところまで来ている。魔法学園（ババ・ヤガーの小屋）にいる、薬学系の教員による治療が行われたためだ。

通常ならば三角巾で吊らなければならぬ右腕が、ギプスだけで済まされているのも魔法によるところが大きい。

「あ、そうそう。例の学生じゃが」

「例の？」

「ランディー・アッテンボロー」

ババ・ヤガーが出した固有名詞に、カネミツは表情を硬くして向き直る。

カネミツとオキツグの同級生であり、噂されていた落第生であり、（ワシリーサのしるべ）に介入した事件の発端。

親しかったわけではない。しかし、「介入者」とのケリをつけたあと、（ワシリーサのしるべ）で隠された顔が露わになったときは、さすがにカネミツも驚きを隠せなかった。

「生きてるよな？」

「おお。ババ・ヤガーの名にかけて、救える命は救ってみせようぞ。

……薬学科の教員が」

「胸を張るな」

しかもドヤ顔だった。

ともあれ、生きているのなら安心できる。カネミツはとりあえず一息ついて、左手で首の後ろを軽く揉む。文字通りの骨折り損はごめんだった。

「じゃが、すでに除籍済みでの。やつがワシリーサにいるのは患者として、じゃ。もう学生ではない」

「……だろうな」

「なーんじゃ、同情せんのか」

「ほぼ落第みたいな状態からあんなことやらかして、それでもここで魔法に関わり続けることができるんなら、最初から落第なんてしねーだろ」

「ふふっ。……はなまるをやろう」

「おい今笑ったよな？ 笑ったよな今!？」

カネミツの叫びもむなく、ババ・ヤガーは慣れた手つきでポストのレポートを回収し、投入口に蓋をして走り去る。「あー全校生徒分のレポートを読まなければならんのかー大変じゃのー」という、感情が微塵もこもっていない声まで遠くから聞こえてきた。

これから研究室に行って、本当に全てのレポートを読むのだろう。ババ・ヤガーはそういう魔法使いだった。新しい世代の魔法使いの、新しい魔法を好む、古き魔法使いだ。

カネミツは大げさにため息をついて、ひとまずクリアした課題を頭の外へ投げ出した。

レポートさえ提出してしまえば、〈ババ・ヤガーの小屋〉の一年は終わる。

あとに待っているのは長い休暇で、一年ぶりの帰郷のために寮の荷物をまとめる必要があった。

ついさっき駆け抜けた廊下を歩いて引き返し、学舎の外へ。

空には巨大な頭蓋骨。その中で赤い炎が燃えている。

オキツグは、当然のように学舎前の広場でカネミツを待っていた。スタンドを立てたライジング・フリーに、軽く腰掛けるような姿勢で。

「間に合ったようだな」

「……なんとかな」

げんなりと答えながら、カネミツは寮に向かって歩きだした。オキツグは一度頷いて、ライジング・フリーのハンドルを握る。スタンドを蹴り上げ、カネミツの隣に並ぶ。

「それでこそ、オレの永遠のライバルだ」

「方向性が違いすぎて好敵手になれねえだろうよ」

「フ……実際に戦う必要などない。魔法にかける熱量の戦いの話だ」
「さよけ」

完全に決着つかないやつじゃねえか、とぶつくさ言いながら、カネミツはふと違和感に気づいた。

オキツグが押すライジング・フリーのハンドルに、見慣れない袋がぶら下がっている。

「なあ、その袋、なに？」

「三十一の顔を持つ氷の女王」

「はい？」

また変なスイッチが入ったのか？　といぶかしむカネミツ。

しかし、オキツグが続けた固有名詞には猛烈に聞き覚えがあった。

「サーティーワン」

「アイスに変な二つ名つけてんじゃねえよ！」

「ちなみにフレーバーはホッピングシヤワーが二つと、ジャモカコーヒー、ロッキードロードが一つずつ」

「クソ……完璧だ……完璧に趣味が被ってる……」

魔法にかける情熱量と共に、味覚も似通っている二人であった。

「今日は進級祝いだ、二つやろう。今度おごれよ」

「こないだのハーゲンダッツでチャラだろうが」

「む……そういえばそんなこともあったな」

「忘れてんのかよ！　……ってそうだ、コタツがねえぞ」

火の玉を出すコタツは、すでに危険物扱いで没収の上、丁重に廃棄されている。

それなんだが、とオキツグは一言挟み、

「普通に暖炉でいいだろ。上から毛布でもかぶって」

「だ……暖炉に毛布でアイス……？」

控えめに言って、完璧な布陣だった。